

謚と氏姓制度について

久保田 真

『元和姓纂』のように氏の起源について明らかにした書物が多いが、氏の成立傾向(何を以て氏としたものが多いか、どのような制度・法則が用いられているか、など)に関してまとまった論を述べたものは、少なくとも今回の調査においては発見できなかった。

本研究の目的は春秋時代に起源を持つ氏の成立状況を調査し、その傾向を明らかにすることである。また字や謚を用いた氏の制定に関する制度・法則が存在しているため、それらが実際にどの程度用いられていたかを探ることも目的の1つである。しかしながら研究期間の都合上、本論文においては春秋時代の魯のみを調査対象とする。なお、調査手順としては以下ようになる。

- 1) 二次資料(『元和姓纂』など)から情報を収集する
- 2) 一次資料(『春秋』など)を用いて内容を補完しつつ二次資料の情報の真偽を確かめる
- 3) 資料同士で矛盾する箇所がある場合、複数の資料を引き比べ、矛盾点を解決する
- 4) それぞれの内容について比較検討し、妥当だと思われる説を採用する
- 5) 最終的に氏を起源ごとに分類し、魯における氏の成り立ちの傾向を探る

このように調査した結果、既存の制度の適用傾向としては「公孫之子以王父字爲氏」、「諸侯以字爲謚、因以爲族」では実例を得られなかった。しかし「公之母弟則以長幼爲氏、庶公子則以配字爲氏」では4つの氏において適用されたと思しきものがあつた。

また、調査の過程において「孫(臧孫、仲孫、叔孫、季孫の総称)」、「公孫」を称する者の条件について一定の規則性を見出すことができた。

最終的には71の氏に関して情報を得ることができた。ただしこの内4つの氏は魯の人物が起源であるとは言い難く、それを除けば合計で67となる。

また、調査した氏を性質・起源ごとに分類したところ、その総数は合計82となった。その中で最も多かったものは字を以てした氏である。単氏(1つの起源から成り立つ氏)では15、複合氏(複数の起源を組み合わせることで成り立つ氏)では字を含むものが3、字を起源とした氏を起源の一部として含むものが7あつた。起源となったものに関して判断を下せなかつた氏においては、8つの氏の全てにおいて字を以てした可能性があつた。

これらの例から考えるに、春秋時代の魯における氏の起源は字を以てするものが主流であつたと言えるのではないだろうか。

(指導教員 松本浩一)